





公山卷四十四

門 達 13
號 279
卷 2



碗又 柳巷 話説卷之二

東都

曲亭主人 編次

明治三三年 一月十日 購求

豊久野に悪棍の友を殺す
 豊久野に赴きて登七に十五貫の沙を償えし。遂に夫團平を救ひ
 出でて劍尾を伴ひく。常花が孝を以て身を賣し。又移列有馬
 の旅客藤松が。是彼首尾を物ぐ。圓平の驚きたる面色
 一六のあしを。ちりゆめ。常花ハ義理ある子なり。彼を賣て
 身活る。ちりゆめ。一。二。三里が程後。直に追惹て
 戻す。も。多。金と。盗。又と焦燥。二。三。兩の金と。て。

公山 卷之二

ちら裳を褰足を踏鳴らして走つて去る。忘井ハいとあつた
 る。小夫の後を慕ひつゝ。や。嘯と。嗚りけく。あま。街を喘ぎ。ぬぬ
 ぬ。平ハく。忘井を謀。裸せ。旅客。旅松を。追。ひ。つ。ぎ。く。強。ま。る。金。も。已
 が。懐。一。路。を。引。ち。ぐ。く。その。日。の。暁。昏。密。澄。七。が。家。に。到。り。若。六。が
 彼。野。に。待。う。け。三。人。を。拍。て。首。尾。好。く。と。り。その。と。澄。七。ハ。若。六。と
 其。小。声。を。低。う。し。曩。彼。人。の。身。より。受。け。お。た。る。金。ハ。と。あ。り。これ。ハ
 廿。貫。の。三。ツ。グ。ニ。ツ。百。五。百。吾。們。辛。苦。沙。に。と。り。ん。ハ。勿。論。の。り。又。貸。入。三
 貫。の。銭。小。足。を。加。て。目。今。返。し。ね。と。い。圓。平。笑。く。若。六。ハ。あ。ん。ん。く。て。ハ
 こ。ら。と。ろ。ぶ。金。を。一。ま。ぐ。め。で。て。三。盃。と。酌。く。金。と。う。ろ。つ。き。遅。小。あ。ち
 若。六。其。許。ハ。二。人。が。あ。あ。あ。身。を。引。つ。羊。も。弱。酒。散。り。死。程。買。く

若。六。ハ。一。兩。の。銀。を。投。下。る。若。六。ハ。を。の。と。應。て。外。面。へ。走。り
 出。ぬ。時。小。圓。平。澄。七。に。密。語。せ。う。元。彼。苦。肉。の。計。り。肺。所
 より。出。く。は。若。六。と。と。行。ひ。ゆ。り。あ。る。と。あ。る。ト。さ。ら。に。配。分
 若。六。若。六。ハ。金。を。と。り。ま。ん。い。の。柄。を。一。其。許。も。一。と。ら。ゆ。ら
 ハ。こ。と。又。カ。を。戮。し。て。這。奴。を。赤。殺。し。其。許。ハ。十。金。を。獲。さ。し。
 こ。ら。若。六。五。兩。を。ひ。つ。べ。し。と。り。バ。澄。七。諾。ひ。く。大。に。歡。び。若。六。ハ
 背。力。も。入。る。に。勝。ま。る。と。侮。ま。く。お。損。だ。る。と。せ。し。う。く。せ。ま
 と。示。し。ゆ。ハ。一。俄。頃。と。多。く。あ。る。捧。を。と。り。生。木。垣。の。左。右
 に。立。躰。ま。今。う。く。と。待。ま。も。あ。く。若。六。ハ。一。掬。の。酒。と。一。尾
 の。鯛。を。引。提。ぐ。枕。し。く。ゆ。り。あ。る。を。き。り。も。さ。ず。澄。七。が。閃。し

つ拂ふ捧ふ諸脛を薙ぐ赤倒せバ園平がと跳すうと
捧もおまよとと赤程に苔六ハ二声も叫びぬど忽地頭を
歩碎られ脳髓出そ死しりたり。すのうが物ぬつとひそめ死あひ。
兩人屍を扛りてゆく野中の菽澤へるげりきとくうくうと。
こそ立ゆりて件の酒を温め鯛と穀子とくゆるせぬ喫むぞ。
澄七ハ酒量薄くてそそくも酔ふすをうそく園平竊は彼
が懐とくの探り十兩の金を奪ひとめく走り出んとすれば
澄七猛ら眼を睜き園平が腕と丁とつて身を起し大盜
と罵つて踵く踏く咽うろを園平左に受外し襟上
あつく楚と引よく咽喉をいこくあめしりるまは澄七ハ

足を岡搔き暗とそらさるにして息絶ぬ浩呼ふ忘井ハ嚮
に夫とんうらむひと彼此を索まどひ火燈を夜の及つと
あてさやうる挑灯をまし提ひあてる澄七が門の戸
がららると引ぬる火影ふ夫婦顔とんあひその忘井ハ
りか夫うといのせもあてず挑灯へまろしと投る茶碗の標裡
るる行燈ゆるぎに弗と吹滅し園平ハ圍り紛まそ背
門口より往方もあらず逐電す類稀る悪棍りりくして
澄七が横死の支天明く後人たどめく是とあり驚ま
さうと然る村長が家に告しる村長が縁由と園司へ祈
まうしりるのさ伊勢國ハ北畠具教卿の采地りるふ



公ノ...



二
オ
レ
老
一
二

組下の足野田井雲内が一子あるが年僅に四支の秋父の
 雲内世と去りて宗達とく憐れ孤と家より引きて扶
 助し雲内が妻野崎とバ又之助が乳母とつ母子のりま
 に養ひぬくて野崎の年月を強く又之助十二歳八太郎十六
 歳といふ年の終つる野崎ハ船江久平といふ若黨と密通し
 遂ふそのる發覚く男女のりまも奔れりあつるに八太
 郎ハ年弱くまどいひま正平きものるまバ母が淫奔のこと
 を面多くおひひく信ぢふ仕しる宗達も野崎とこそ
 憎め彼仕伎が志の切るるとよくあつて恩耦殊く厚く死
 ハこそ死宗達ハ年来腰痛を患るとめて撰列有馬に赴

さて湯治せむやとおひひ今茲五月の上院主君大宮忍
 齋に縁由と申して去りて湯本の谷町なる藤松が家に逗留
 ハ太郎をねく彼地へ到り湯本の谷町なる藤松が家に逗留
 入浴するとせ日あまうりたむび持病の腰痛頓々愈て
 身體健るるりぬげふとの温泉ハその性温和うて辰砂の氣
 を帯味ハ鹹くして潮のごとくよく血脉を潤下焦を暖め氣
 をやぐらう瘡冷を去ると唐士驪山の温泉も等しくいふ
 朝芽一番の名湯なりまバ當初嶋大臣此湯を認りてより
 舒明孝徳の西天子行幸の跡長く修り行基菩薩の昆湯
 の池水深き今も入口は贈灸するる名譽の温泉もま

ちて松とびつ又彼湯と妬婦と稱しり。按ずるふらふら
 後妻の和訓あり。和名鉞。今妬婦と書るもの
 美のまご詳らるる。その子孫世々松とゆへ家
 号とするるべし。とあるは怪しむ。彼家の男女の私
 夫婦の相語とあるは妬婦俄頃怒涌て鯨の潮を吹か
 しく常にあらぬ熱湯の八面へ散乱して草木を枯し人の
 膚を傷らるる。日と程ても冷るる。是併後妻の
 怨まきく湯坪に黄縁て末世とりども。私情と妬りりく
 さまばゆ。彼湯の積りたる。その家に密通の男
 女あるとありて巖穿鑿し。あばし。あばし。追出すとぞく

せむは熱湯をすく。怒涌つて己ことる。故るの。とて
 藤松が家の湯女いり。怖まき。その行ひを情れば却て主
 の僮侍とる。今の世中。怪異多し。とりども。紅顔の
 女子彼湯坪に立ち。天結陰。湯のあつことありと
 り。外にも禁忌多し。葦毛の馬。滋藤弓。白羽の矢。獲
 飼ホ尾あり。當所の領主湯の山に獵して温泉の神と
 射し。領主忽地落馬して墮す。件の弓矢馬ホ。其
 主従ハ。古跡を一見し。又妬湯の由来を尋く。あま
 しく。又和哥を嗜り

此は家累の準備に當地の名産竹器木地の挽物有馬
 鍛治が小刀裁刀楊枝湯の花鳥子紙管小笠筆など
 夥買しつらるるに筆工いとよく浴も恥すよく賞翫す。
 今も彼所より出ず筆と諸國の商人受けよくと賣る。
 大筆あり小筆あり所謂有馬筆と稱る小兒の翫は管の
 中より人形の出する機關ありと云又餘國のあらざるものと
 是より先宗達ハ雨の日の筆のすまのふ書捨る詠草多
 りると常花ハ折る夕餐の給待すよく不憶彼詠草と
 ころにいと愛しく死なば宗達ハ對ひてころにふも短
 冊一枚をゆきせぬと云ころは宗達微笑りて筆ハ小湯女

るに。ゆきせぬと云ころは宗達微笑りて筆ハ小湯女
 公さま 伶俐顔色も艶くありゆきせぬと云ころは宗達
 あり又之助に妻すべし。その一件を羨引ハ短冊ハ望しむる
 幾枚ありをもとせんとせんと戯るくと常花ハ實言をて形を
 改めころ身ハ伊勢の國掠木の郷ふしと云く幼きと死父を
 喪ひ母又往方もよくありて外にころは宗達もゆきせぬと云ころは
 方ハ仕せし身と償てよくありて外にころは宗達もゆきせぬと云ころは
 宗達もよくころは宗達もよくころは宗達もよくころは宗達もよく
 の城主大宮どの家隸ハ宛石何がと云くころは宗達もよくころは宗達もよく
 本はその間まうらふと云くころは宗達もよくころは宗達もよく

冊とぞらせんとて。臂ぢりあると。二枚をうりうのまうく。又い
 ち。是はハコ子と替縁の聘礼。まもつて秘藏せし。兩三年の
 間。うらうらと。迎へて。うらぶ。と。詫きつ。彼短冊を。うらぶ。
 常花ハ左右の。手に受て。こまを。うらぶ。

新章

津の國のひとの。あつ。有馬山。の。まう。を。うらぶ。雲。と。うらぶ。

後撰

ちぢり。まう。うらぶ。松山浪。と。うらぶ。

と古哥二首と書く。る。と。回数。戴捧。と。うらぶ。れ。げ。退出
 たり。うらぶ。宗達ハ。帰路。の。期。まう。うらぶ。主。従。三人。有馬。と。發
 足。と。勢。列。へ。立。飯。ら。常花。ハ。名。残。を。まう。涙。と。うらぶ。別
 たり。と。宗達。ハ。伊。勢。に。飯。ら。と。うらぶ。所。勢。に。暇。まう。て。五。七。年。の



蛇を拂ひ落すおれも七郎二も出た出く。のうまに蛇をお殺せし
 うが宗達はその頭と突碎き兩戸を押し明て假山のあまを投捨
 たり。あつた次の日燕の雛も親ももる。巢より落ちて死ぬまを
 件の兩人と不審ぞつくつく。あつたあつた赤あつた。蟻数多緑類
 を伴ひて燕の巢の改登り又死つる燕中も数千の蟻群とあつた
 ぬりぬり痛と蟻の出るどろどろを究りんと庭ふら出つ
 假山の後へ至まば怪む。昨夜殺つる蛇一夜の中に齧爛て蟻
 いその腹よりぞ生るる。勇まを常とする武士。あつた毛髪い
 だちて寢ぬそのあつた蛇にまするのあつた。舌と振つて
 敬馬嘆すといども。妬婦が舊魂今宗達がとめ来つと常花と索

るを妬と既水深く障礙をす。あつたあつた。是よりして妬婦が墓
 の辺の流湯にのり。その觸るるのあつた。そのあつた。死するを
 里人未彼谷と地獄谷と名づけ。又流湯は石を壘て井のどく。あつた
 毒禽湯と稱るると世あつたの地獄い。あつたあつた。宗達七郎
 二い。あつたの期にる。あつたあつた。あつたあつた。あつたあつた。
 ころるに。その夜俄頃。七郎二が醫に瘡出来と痛を。あつたあつた。あつたあつた。
 にもあつた。あつたあつた。あつたあつた。あつたあつた。あつたあつた。
 べ。其許の先。あつたあつた。あつたあつた。あつたあつた。あつたあつた。
 をやせ。あつたあつた。あつたあつた。あつたあつた。あつたあつた。
 君の録と食もの。あつたあつた。あつたあつた。あつたあつた。あつたあつた。



希ふあど忍有ましく、驚死怪しき事も又如此くのありて、
 嚮の怪異を述べあらし、俄頃ハ武士四五十人ををらりし出し、
 汝亦宗達が飯るべき路の口に待つけ、速に討と捨直に又之助
 を生捕まへるべしと下知す。いふまじきけり。配し、対面へ走
 去らば、七多二が妻との形勢とくくうくう、城主の恩を謝し、建
 恨の涙を袖に畏して、宿所ハ飯りたり。宛石宗達ハうらるあり
 こそ、まじき七郎ニ有馬のとり、さうと。その妻に告をらし、て
 迎の人と違ふべしとて、日ひく路をいそぎ、阿坂の城の裡ちり、淡川
 の川上なる。袖岡山の雄多とさるに、何くも、武者二三十人走り
 きて、犇くと路を遮り、一人声高、うら、うら、うら、宛石宗達城ま

命あり、汝偽て津国へ赴き、三好の内應して、尾七多と殺せし
 る。明白に参りせり、よみて、汝との所ゆて、誅するぞと罵り、敢て各
 鎗を捻て衝て、鬼まじき宗達ハ、不意と、かうりに、回答するに、
 追ふけまじ、己上をいはず、刀を抜て、右ハ柱、左ハ當り、千変万化と、
 挑み、我ふと、いども、その身、金石のゆらざれば、遂に、野の深きを、負
 て、路の次ハ、突伏し、らうて、討ちの、武士ハ、宗達ガ首を、刎て、鎗の
 又先に、貫き、直に、その家、に、推して、又之助、を、搦んと、せ、あつて、
 返し、搦め、ゆんで、を、走らる。この日、宛石、又之助、ハ、父ガ、飯展も、後
 ち、くらし、とて、若黨、八太郎、に、書、存の、塵、さう、死、拂ハ、史記の、伍子
 胥、が、傳、を、讀、て、居、り、る。八太郎、慌、し、く、走、り、ま、る。実、母、ら、ん。



